

平成28年 2月 4日

論文審査結果の要旨

| | | | | |
|---|---|----|--------|--------|
| 専攻 入学年度 | 資源環境科学 平成20年度(10月)入学 | 専攻 | 氏名 | 岩淵 真奈美 |
| 論文題目 | 天然記念物ニホンヤマネ <i>Glirulus japonicus</i> の生理生態に関する研究 | | | |
| 審査委員 職名及び氏名 | 主査 | 教授 | 森田 哲夫 | |
| | 副査 | 教授 | 芦澤 幸二 | |
| | 副査 | 教授 | 續木 靖浩 | |
| | 副査 | 教授 | 川末 紀功仁 | |
| | 副査 | 教授 | 河原 聡 | |
| 審査結果の要旨(800字以内) | | | | |
| <p>夜行性で観察が難しい希少種ニホンヤマネの野外での生態は殆ど知られていず現在基礎知見の蓄積が待たれている。そこで、野外での餌資源利用と冬眠・日内休眠に着目し、エネルギー収支に関わる生態について解明を試みた。</p> <p>直接観察により野外での採食行動を追跡した結果、本種は花や新芽や花蜜、漿果など消化性の高い植物性の餌資源が存在する時には植物性の餌を選択し、これらの少ない夏期には昆虫など動物性の餌を主に選択する雑食性であり、その餌資源量は季節変動が大きいことが示された。また、利用する餌のなくなる冬には自然・半自然の両条件下で体温を環境温度付近まで低下させて長期間に亘って冬眠することを確認した。冬眠巣が浅い地中に位置することから冬眠時に体温が環境温度の影響を受ける可能性があり、冬眠の持続には環境温度が0℃近くで安定する微小生息環境が重要であることも示唆された。この期間中、自然・半自然の条件を問わず冬眠途中で復温する中途覚醒を認めしたが、その間に出巢することはなかった。冬眠終了が近づくと、休眠持続時間が24時間以内である日内休眠が頻繁に生じ、平常体温で過ごす時間が徐々に増加した。毎日一定量を給餌した試験の結果から、冬眠開始前に自発的食欲減退が起きることと食物欠乏が本種の冬眠開始の前提条件ではないことが示された。また、活動季にも日内休眠が生じることが明らかになった。この日内休眠の発現には食物欠乏が関与しないことが示された。これらの結果から本種は季節を問わず環境変化に休眠で応答しエネルギー節約できることが判明した。</p> <p>以上、明らかになったニホンヤマネの基礎生態は、本種と本種の生息環境、双方の保全を図る上で有用であり、学術上の貢献は高く、本研究論文が博士論文としての価値を十分に有すると判断した。</p> <p>さらに、公聴会での発表および質疑応答も適切であり、本審査委員会は論文審査および最終試験に合格したと判定する。</p> | | | | |

(注) 論文題目が外国語の場合は日本語を併記すること。